

Title	近代日本における自己探求と国家意識 : 北村透谷・石川啄木・中里介山
Author(s)	小寺, 正敏
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24952
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【12】

氏名	小寺正敏
博士の専攻分野の名称	博士（国際公共政策）
学位記番号	第 25740 号
学位授与年月日	平成 25 年 1 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	近代日本における自己探求と国家意識—北村透谷・石川啄木・中里介山—
論文審査委員	(主査) 教授 米原 謙 (副査) 准教授 河村 倫哉 教授 森藤 一史 教授 竹内 俊隆

論文内容の要旨

政治と文学は、しばしば対立関係にあるように考えられがちであるが、現実には必ずしも明確に裁断された領域で完結しているわけではない。前近代の日本では、文学は聖賢の道を記した典籍の学びと理解され、その限りでは経世の学としての意味を持っていた。民衆対象の娯楽文芸も存在していたが、それは戯作と呼ばれ低く見られていた。近代文学は伝統的観念を克服して確立したが、近代的自我の内面の語りとしての場となるとともに、非政治的な領域に内面的世界を築く契機ともなった。

しかし、文学に軸足を置きつつも、各々の問題意識から政治や国家の問題に関心向けることになった文学者たちがいた。この研究ではその文学者たちとして、北村透谷、石川啄木、中里介山を取り上げる。彼らはいずれも文学の領域に自己の活動の場を求めながら、同時代の歴史的現実に対する認識を深めることによって、独自の文学的言説を紡ぎ出していった。結果的には、彼らは非政治的な文学に没入することもできず、現実の政治活動からも距離を置きながら、政治と文学のはざまで「経世」の道を探ることが、彼らにとっての生き方を求める自己探求であった。「経世」を可能とする現実との接点が、彼らにとって自己実現を果すべき「居場所」であった。彼らの文学は「居場所」を探る自己探求の苦闘から創造されたのである。

北村透谷は自由民権運動に経世の志を抱いて参加したが、運動からの離脱によって深い挫折感を抱いた。この創傷体験が彼の自己探求の起点となった。彼は民権壮士の意識との訣別を果たしたが、それに代わる「居場所」を発見することができなかった。山路愛山との文学人生相渉論争は文学の社会的意義を確認する上で重要なものであったが、透谷自身が人生にいかにかに相渉るかを問われつつ、「国民

の元気」と表現された自由な精神をいかに発揚させるかという課題を未完のままに残して逝いた。

石川啄木の場合は、ロマン主義的な自我の主張が文学の出発点であり、初期は政治に深く傾くことはなかった。文学を志す故の生活の破綻状態にも拘らず、文学への意志は強く持続されていた。しかし、生活人としての現実への関わりから、政治や社会への認識を深めることになった。後期の貧困の中で社会主義に近づいた段階では、社会意識に一層の先鋭さを加えたが、彼なりの経世を果たすべき「居場所」を発見することなく貧困のうちに病死した。

中里介山は啄木と同世代で、貧困生活と社会主義の経験において共通点があるが、主たる活動期は啄木の没後での大正期以降であった。彼は大衆文学の領域を開拓して文壇での成功を収めることになった。しかし、彼自身は大衆作家としての評価を否定し、大作『大菩薩峠』で大乗的菩薩思想に基づく現世の楽土たる国家像を描こうとする試みに到達した。彼の国家像は現実の超国家主義運動に重なる部分もあるが、彼が晩年に到達した「草莽」に生きる民衆としての視線からは、現実の日本帝国は「楽土」たり得なかったであろう。

透谷・啄木・介山は各々の文学史上の評価を定まった観があるが、思想史上の対象としては一見して奇異の印象を免れない。しかし、彼らの内面に沈澱していた「いかに生きるか」という課題を文学創造の中で追求したこと、生き方を模索する過程で独自の社会的位相から政治や社会に対する認識を深め政治思想的言説を紡ぎ出したこと、このような一連の自己探究の営みが、彼らの政治意識を内面から支えているのである。彼らがいずれも完璧な「居場所」は探し得なかったことは、政治と文学の差を歴然と示す結果となったであろうが、彼らの同時代の歴史的文脈において考察すると、明治国家がファシズムに暗転する状況の中で、自我と国家との調和点を模索する苦闘が示されていたとすることができる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近代日本の転換期を生きた三人の文学者の文学表現に示された国家意識を解明し、それをつうじて近代日本の思想的特徴をあぶり出すことを意図したものである。対象とされているのは、自由民権期（とくにその崩壊期）を生きた北村透谷、明治末期の「時代閉塞」を代表する石川啄木、1930年代のファッションの時代を「大衆小説」によって表現した中里介山である。この三人の作品は、文学史においてすでに確固たる位置づけがなされているだけでなく、政治思想の分析においてもしばしば援用されるが、本論文のように三人の作品を真正面から対象にして政治思想を論じたものは前例がないであろう。しかも対象とした文学者たちはいずれも（一時期の例外を除けば）積極的に政治活動に関与したことはなく、体系的に政治思想を論じたこともなかった。文学表現のなかに示された国家意識を探り出すという本論文の作業は、決して容易なものではなかったことが想像できる。

小寺氏はあえて困難な課題に挑んだといえるが、そこには「近代自我」に対する強い関心がある。身分制にともなう職分意識から解放された「近代人」は、自らの生の意味づけという課題に直面し、文学表現という形での「自己探求」への道に向かう。そこには「居場所」を失ってデラシネとなった「自我」が、ニヒリズムの誘惑を退けて他者との連関を探し求め、その彷徨の彼方に「国家」を発見するというストーリーがある。三人の文学者の分析はほぼこうしたストーリーに沿って展開されている。本論文は全7章からなるが、最初の3章が透谷を対象としており、これが全体の半分近くを占めている。第1章では民権派壮士との交流と挫折が説明され、第2章では難解な『楚囚之詩』がその挫折体験とのかかわりで解釈されている。そして第3章は、山路愛山との有名な人生相渉論争の検討を通して、透谷がめざした文学表現とその背景に潜んでいたナショナリズムを抽出している。

第4章と第5章は啄木を論じたものである。まず第4章では、啄木の生活体験・挫折・「居場所」喪失が説明され、貧窮した実生活にもかかわらず、啄木が社会主義や非戦論には向かわず、むしろロマン主義的文学観にもとづいて現実を超越した所に理想を求め、結果的に国家主義に傾斜したことを指摘する。次に第5章では、啄木の政治思想の転換が論じられる。日露戦勝によって日本は「一等国」となり、社会的には個人主義の傾向が顕著になったが、こうした風潮をしり目に啄木の生活はさらに悲惨の度を深めた。文字どおりのデラシネ生活のなかで、幸徳秋水の大逆事件に異常な関心を寄せた啄木は、他方では、国家社会主義者と理解される可能性があることが示唆されている。

第6章と第7章は中里介山を論じている。第6章では、まず介山の実家の没落と社会主義体験が紹介され、彼には農本主義的な傾向があることが指摘される。第7章は長編小説『大菩薩峠』の内容を紹介し、そこに表明された政治思想を分析したもので、介山の「居場所」探しの結論は農本主義的な共同体の理想であり、明らかにファシズムと共鳴するものだったことが指摘されている。

本論文は日本近代全体を対象にした大きな構想力にもとづいており、小寺氏のこれまでの研究成果の集大成である。叙述は時に冗長に流れた箇所もあるが、全体の筋書は明快であり、テキスト解釈も適切で説得力がある。以上によって、審査員は全員一致して、本論文が博士（国際公共政策）に値すると結論した。